



日本ボーイスカウト神奈川連盟 川崎スカウトクラブ

巻頭言

[生物多様性を考える!]

会長 谷本 通安

生命の豊かさを表す概念の「生物多様性」は個人や立場の違いだけでなく国によって、或いは時代によっても様々である。生物多様性は「生物資源」と「生物基盤」の価値の両方であるが、今、地球上の生物多様性が危機に直面していると言っても過言ではない。

国連は2020年までの生物多様性計画「愛知目標」「自然と共生する世界」20項目を掲げるも部分的に達成されたものもあつたが全般的には不十分なレベルと厳しい評価を下した。

森林破壊や海洋汚染は止まらず生き物が息する環境が悪化し、絶滅する種が後を絶たない。

我々は自然が生き物と繋がり、種々な“恩恵”を受けている一方で、容易く繋がりを壊し人間社会への悪影響が懸念され生物多様性を大切にすることは繋がりを尊重しバランスを良くすることである。

目標が達成できなかった要因は、2020年初頭の新型コロナウイルスによるパンデミックの発生、世界各国は外出禁止、自粛等都市封鎖、更に出入国制限といった施策対応や地球温暖化による気候変動の影響が考えられる。今こそ環境問題と同様に地球規模での世界的協調が必要な事実にも拘わらず寧ろ国単位で孤立化傾向が強まっており、日本政府の戦略は一貫性が否めない。

地球はひとつの理念の下、国家間対立を排除し、生物多様性の保全の為に自然からの乖離を回避して人類共通財産である「地球公共財(グローバル・コモンズ)」と位置づける必要がある。そうして「人類共通の生存基盤」と理解し、国、企業等の行動規範を確立することが望まれる。

「愛知目標」の「未達成」という現実を受け止め、真の取り組みこそが今求められている。人間社会は生物や自然環境から計り知れない恵みを将来に継承し、自然と調和・共存する「自然共生社会」実現を目指そう。



(愛知県 HP)

令和4年度(2022年)年次総会

事務局

今年度年次総会は例年通り2月11日(金・祝)を予定で準備を進めていましたが、新型コロナウイルスによる「まん延防止等重点措置」解除前であり感染者も減らなかったため、昨年度に続いて[書面評決]に急遽変更しました。

会員19名中(顧問、相談役除く)16名の方から「賛成」の返事をいただき、会則11総会「議事は出席者の過半数で議決される」により令和4年度議案は可決いたしました。皆様にご協力いただき有難うございました。前年度はコロナに振り回されて殆ど活動できなかったため、今年度こそ期待したいものです。

[私とスカウトソング]

BS活動にソングは欠かせないものであり、スカウトソングにまつわる思い出や、かつての仲間を思い出す歌、今も口ずさむ歌等、ソングにまつわるエピソードの特集です。

[スカウトソングは音痴に歌おう？]

井村 修治

東大医学部の教授を親子二代、三代で輩出している家系がある。一方の雄が緒方洪庵の一族である。福沢諭吉が学んだ適塾の創始者であり、種痘でも傑出した業績を残している。他方が三宅良斎（ごんさい）である。子息の秀は日本で初めて、医学博士を取得している（明治24年）。

この三宅家は長崎県島原北有馬の出である。

同じ時期、同村の末永敏事はシンシナティー大学に留学し、医学博士を取得している。井村荒喜は苦学の末、福井県にて不二越工業を立ち上げている。三宅亮二は大阪大学で医学博士号を取得した。北有馬今福（いまぶく）はあまたの人材を輩出している特異な村と言えるだろう。

島原はキリシタンで有名だが、これらの集落は仏教徒である。キリシタン農民は根絶やしにされ、これに代るべく強制的に九州各地から移住させられた農民は、当然ながら安全な仏教徒だった。

ちなみに今福は佐賀県からの移住民である。

実は私の祖父も同じ漢学塾の同期同門で、この方々らの引きで東京に出たらしい。もちろん隠れキリシタンも教義を深く秘めたまま、この島原で徳川の世を忍んで暮らしておられた。

明治になり信仰の自由を勝ち取った女性が長崎の教会で司祭に自らの隠れキリシタンを告白した話はあまりにも有名だ。この際、調査したキリスト教関係者をさらに驚かせたのが、オラショの文言と讃美歌だった。口伝を十代も重ねていけば、誤びゅうも生じるだろう、いな生じて当然だ。ところがなんと、彼女たちの唱えるラテン語を理解できたのだ、正確だったのである。

ところでスカウトソングも、リーダーや先輩スカウトが歌っているのを聞いて覚える場合が多い、オラショとたぶん一緒だ。

もう早いもので30年も前のことだが、現川崎43団の育成会長小山さんと夏キャンプの下見に行くことになった。当時からBS活動の申し子のような人で、「井村さん、スカウトソングのテープを借りてきたよ！聞きながら行こうか！」である。

ところがいざ聞いてみると、あまりにも歌い手が上手すぎるのか、むしろ拍子抜けして二人で笑ってしまった。歌詞は一字一句同じなのに、なぜか、少なくとも私の知っているスカウトソングではなかったのである。うまく説明できないが、私のスカウトソングにはかつてのリーダーや先輩の、さらに共に過ごした野営地などの思い出がともに詰まっている。むしろ正確な音律より先輩たちの声が聞こえて来るような、その音痴な歌声が懐かしいのだ。誤解を恐れずに言えば、オラショと一緒に、音律より中身の文言が重要なのだ。

オラショの親子伝承のように、スカウトがリーダーになり、10代さらに20代と代替わりしても、同じスカウトスピリッツが伝承されたらうれしいと思う。



よく歌を教えて頂いた、松行（当時慶応大学院生）さんの
“ホールディアー”



【私とスカウトソング】

小川 芳郎

コロナ禍の前年、孫の男の子が小学校1年生の時のことである。夏休みを信州木曾で過ごそうと7月中旬に娘夫婦家族が静岡から、私たち夫婦が東京から集まった。そして皆で御嶽山の麓にある開田高原へ行った。白樺並木を通り、木曾馬の里牧場に行き、馬に草を食べさせて遊んだ。

昼前には隣接する開田ファームへ到着。700円の入園料を払い、食べ放題のブルーベリー狩りに挑戦。係員の説明によると園内には14種類のブルーベリーが栽培されていて、カブトムシが止まっている木は今熟しているとのこと。「黒く完熟している果実を選んで、5～6粒一度に口に含むと美味しい」と言われたのでその通りにやってみると、葡萄を食べているような濃い味になった。木に付いた名前を読み上げながら、お土産にするブルーベリーの種類を味わいつつ決めた。果実は柔らかく、ヨーグルトと一緒に数日間朝の食卓を楽しませた。

夜には木曾節で踊る木曾踊りを見たり、花火をしたり、昼は赤沢美林のトロッコ列車に乗った。

こうして楽しい5泊の夏休み旅行も終わり、二組の家族が分かれる時が来た。孫の男の子はボーイスカウトには入っていないが、私からキプリングのジャングルブックの絵本を贈ったりしていた。

私は孫の親指を握り、孫には私の親指を握らせてから、「仲よしの輪」を歌いだした。ぼくの親指、君の親指、がっちり組んだぜたのもしい指、親指同士約束したぜ（私の替え部分は「よ」）、また会う日まで、しっかりやろうね（私の替え部分は「元気でいようね」）と歌いながら指に力を込めた。

孫ははにかんでいたが、心が通じて、嬉しそうにバイバイして別れた。次の春休みにも再会した。宇山高原で私とテニスをした小6の女子の背景には、満開の桜と雪を被った木曾駒ヶ岳が間近に見えた。りす・・・ピョンピョン、ピョピョピョン道案内だと「カブ山あんない」歌ったら、弟が真似て歌い面白いと言った。そしてまた別れに「仲よし

の輪」を歌った。



【山の友よ】

境 紳隆

現在使われている「SONGBOOK」（平成7年改訂版）には、その前迄の版には載っていなかった歌が幾つか掲載されています。「山の友よ」もその一つです。譜面を初めて見た時それが、手許にある「ダークダックスの抒情歌Ⅲ山の歌集」に収録されている「山の友によせて（山の友よ）」であることが直ぐにピンとききました。歌詞を読めばこの歌が大学山岳部等の歌であることが容易に察せられます。



そこで少々調べてみたところ、昭和7年に（旧制）成蹊学園高校旅行部（今の成蹊大学山岳部）メンバーが、谷川岳山麓に自分達で建てた「虹芝寮」（こうしりょう）の寮歌であることが判りました。

虹芝寮はその後学園の施設として活用された時期もあったようですが、今ではOBを含めた山岳部の自主管理になっているとのこと。

ある時職場の先輩が成蹊学園の出身であることに気づき「この歌ご存じですか？」と尋ねたところ、「君は何故この歌を知っているのだね？」と聞かれ、「ボーイスカウト歌集に掲載されている」ことを説明しました。偶然でしたがその先輩は山岳

部のOBで、今でも時々虹芝寮に出かけては管理をしていると伺いました。と或る大学の山小屋で作られた歌が「寮歌」となり、関係者の間で細々と伝承されていたところ、山男の間で愛唱されるようになり、今ではボーイスカウトの歌集に掲載されているとは、きっと作られた戸田豊鉄さんは想像だにされなかったことでしょう。

スカウト活動の中では殆ど聞く機会の無い歌ですが、山男達の哀愁漂うこの歌をRS達にもっと歌って欲しいと思っています。

[スカウトソング]

稲葉 正明

小学3年生(1963年)の10月にカブスカウトの集會に初めて参加して、二つの歌を覚えました。一つは“幸せなら手をたたこう”でした。坂本九さんが歌い始める何年も前でした。動作のついた歌が楽しくて、学校でも歌っていました。この歌がスカウトソングなのかは分かりませんが、1964年に出版された日本連盟のボーイスカウト歌集には載っていません。その後の改訂で加えられたかもしれませぬ。アメリカのボーイスカウトもよく歌います。ボーイスカウト歌集には“野に山に”、“営火のまどい”、“楽しい歌・愉快的な歌”、“ホームソング”などのジャンルに分けられた160を超える歌が載っています。この中には作詞や作曲した人が示されていない歌も沢山あります。



歌集を見て覚えた歌は少ないのですが、その理由は歌集の文字が小さかったからです。そのため、ほとんどの歌はリーダーや先輩スカウトと一緒にくちパクをしながら覚えました。そして、スカウティングを通じて覚えた歌は、いつ、誰に、どこで教えてもらったのかが思い出せませぬ。『幸せなら手をたたこう』馬場邦一隊長(当時)に教わりませぬ。黒沢明副長(当時)から、副長が大学ローバーとして遠征した台湾から持ち帰った歌

を覚えてもらいました。歌詞は、“フェーチャーペツキャリット アモイカチュン、、、”でした。

一度聞いただけで歌詞もメロディも覚えられてしまう楽しい歌でした。

よく口ずさむのは、『月下の営火(今宵この森に)』です。キャンプファイヤの炎がだんだんと大きくなって、薪の中にくべられていた小枝がパチッ、パチッとはじける音が頭の中で重なります。

“つ〜き〜き〜よ〜し〜(月清し)”まで終えると、その次は、『夜の歌(遠き山に陽は落ちて)』のゆっくりしたメロディに移ります。趣向をこらしてキャンプファイヤに火をようとしているリーダーの姿が目には浮かびませぬ。炎に照らされたスカウトの顔や薪の燃える匂いもよみがえります。この歌の順序はキャンプの営火と逆になりますが、一人の時にはいつも、“こっよ〜いこのもりに〜、、”から始まります。

中学3年生の時に、川崎市立青少年の家(宮前区宮崎)に市内の学校や青少年団体で活動する同学年の生徒たちが集まり、一泊研修をしたことがありました。プログラムの最後は参加者による合唱でした。指導いただいたのは、主任講師の長谷川雅秀氏(川崎第39団)でした。『シャローム』という歌を教わりませぬ。題名はヘブライ語で平和の意味だそうませぬ。“シャーロンシャベリ、シャーロンシャベリ、シャーロン シャーロン、、”と続く歌でした。イスラエルの人たちが仲間と別れるときに祈りの気持ちを表したり、普段の挨拶でも使うそうませぬ。初めて聞いた歌でした。長谷川さんの気高い歌声とともに忘れられませぬ。

ボーイスカウト歌集には、それまで誰も聞いたことのない歌を採譜したものが載っています。

“シンシャン グリグリ グリグリ ワッシャ〜、、”で始まる『狩の歌』は古田誠一郎先達の採譜と記されていて、踊り方と雄叫びのしぐさも説明されています。採譜していた時の様子は連盟歌『花は薫るよ』の一節そのものだったように思われます。“まなこひらいてみきわめよ、、、みみそばたてて、ききただせ、、”と。

カブスカウトの初めての集会で覚えたもう一つの歌は、“カブスカウトだ”でした。『さだめとモットー』の部分に、“じぶんのことはじぶんでし～ま～す、”という歌詞があります。カブスカウトの時には元気に歌っていましたが、今はどうだろうか？と身構えてしまいます。幸いなことに“たがいに～たすけあ～います、”という歌詞もあり、ほっとします。

スカウトソングは意味深いです。

続 [ありがとう 川崎球場]

高安 征夫

また、奇縁がありました。前号第38号に掲載された冊子「ありがとう 川崎球場」の原稿を書き終えた直後の12月2日東京新聞朝刊に「野球殿堂入り」候補者が発表されていて、その中の「特別表彰」部門の中に高橋龍太郎の名前を見つけましたが、名前だけでは不安なため念のためスポーツ紙で確認すると確かに「高橋ユニオンズオーナー」であることが判明。ひとり小躍りしました。

「でも何故65年も経った今なの？」疑問がわきます。でも、ひょっとすると、思い当たることがあります。川崎球場では以前から球場に関わる元選手等を招いてトークショーが開催されていて、2019年2月には“まさかり投法”で名を上げた「村田兆治」氏がゲストでした。ポスターを見ると従来は無料だったトークショーが今年是有料とのこと。確認のため球場事務所訪ねたところ、偶然にも球場支配人の田中育郎氏と出会い雑談の中で

[高橋ユニオンズ]の話が出ると支配人から「高橋ユニオンズを知ってるんですか？」と…。そこにトークショーの司会を担当するニッポン放送のスポーツアナウンサー松本秀夫氏が打合せを終えて帰るところに出会い、支配人の計らいで紹介されて、その際に「松本さん、高橋龍太郎さんの野球殿堂入り運動を起こしてくださいよ」と声をかけました。ひょっとすると、この一言が今回の候補者に名を連ねたきっかけになったのかと…。

後日、田中支配人から松本さんに確認してもら

った処「特別な働きかけはしないが、放送では何回か話した」との回答でした。となると放送を聞いた関係者が動いたか、いずれにしても65年もの歳月を経て寝ていた話題が突然出てきた不思議さは。まさか私の言った一言が一石を投じたのかと推察しています。今回の殿堂入りはかないませんでした。候補者として名前が挙がっただけでも…。そして奇縁は続きます。川崎区の地域振興課が毎年開催している地域史を紹介する「かわさき産業ミュージアム講座」が今年のテーマは「川崎球場の過去・現在・未来」講師は田中支配人です。なにか前号の「ありがとう 川崎球場」の続きのような縁を感じます。開催日は2月13日(日)前日には支配人直々「明日は大丈夫ですか？」の電話にちょっとビックリ。事前申し込みによる先着50名と限定される中当日は生憎の天候にも拘らず、会場内に準備された椅子は開会頃には老老男女で満席状態。定刻2時開会、スライドによる映写に講師の解説が加わり、川崎球場は戦後の復興事業の一環として昭和27年(1952)4月に誕生。

その後、紆余曲折があつて昭和29年(1954)プロ野球の本拠地として[高橋ユニオンズ]が誕生。

スライドは年毎に映し出されて話題になったゲームの時は講師から「この試合見た人いますか？」に「俺、見たよ」等々、参加者全員が何かの思い出を持って集まっていて、ある御婦人は「バイトをしていた時、私は土井捕手(大洋)の靴を磨きましたよ」などという思い出を秘めた人の集まりで和やかに進みました。講師から私に「高橋ユニオンズの川崎球場での最後の試合を見たんですね」とわざわざ問いかけもありました。途中から“パ



ンチ佐藤氏”(元阪急)も加わり一層盛り上がり予定時間を大幅にオーバー

して閉会。閉会后、“オリオンズ OB 会元応援団長”横山健一氏と立ち話をする機会がありました。

当日の夕食後家族から「今日のことがツイッターに載っているかも知れないよ」という事で、今まで一度も触れたこともない“ツイッターを押すと、何と横山氏のぶやきが目に、読めば明らかに私の事。(ツイッター1) 思わず横山氏に電話をしまい、高橋ユニオンズの話から今のマリーンズの話へと尽きない状態。再会を約して電話を切りました。すると、その後また横山氏が「なんと！先程この大先輩から電話を頂きました…」(ツイッター2) と。今まで一度も触れた事もなかった“ツイッター” ボタンを押したため“つぶやき”に出会う。まさに奇縁の連続。80歳を過ぎた今、次から次と続く奇縁に青春期のような“ワクワク感”に包まれています。



(ツイッター1)



(ツイッター2)

【川崎地区創立 70 周年記念誌】に思う

渡部 公

表記の記念誌は境編集担当長はじめ編集委員の方々のご努力により 3 月 15 日発行されました。

この中で「川崎市・ボーイスカウトのあゆみ」「企業（職域）隊」を担当させて頂きましたので、その“思い”を述べて関係した皆さんに感謝を申し上げる次第です。

1. 書いた動機

川崎地区の特筆すべき点、利点を挙げると次のようになる。

- (1) 川崎市一行政区一地区である。
- (2) 企業（職域）隊、発隊と活動
- (3) 賛助会設立と活動

(4) 姉妹都市・ボルチモア市との国際交流事業
個々の活動内容は今回の記念誌に詳細に書かれているため、是非参照して頂きたい。

創立 30 周年記念誌（昭和 57 年(1982) 発行）以降 10 周年毎に記念誌が発行されているが、川崎地区創立 70 周年を機に、地区発足以来のあゆみを一貫した記録として残しておく必要性を感じていたことと、若い指導者が地区のおい立ち・歴史を理解するため参考にして貰いたいとの思いがあった。

2. 参考資料について

手元にある川崎地区創立 30 周年記念誌は〔多摩川三十年のあゆみ〕(S57 年(1982)) である。

この中に初代地区協議会長小清水黄二氏が川崎市青少年育成連盟記念誌 (S35 年(1960)) [10 年のあゆみ] にボーイスカウト川崎地区協議会のことを書かれた [生い立ちから 10 年] が発行責任者、秋山六郎氏の解説付で転載されていて、川崎地区

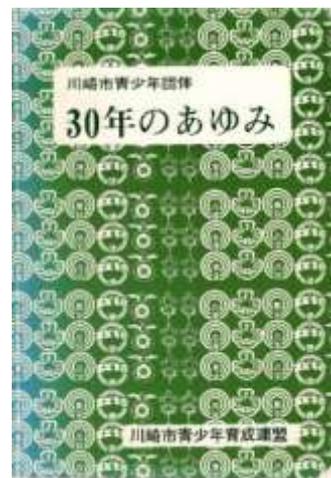


発足の背景から 10 年間の記録と共に職域隊発足の経緯等も詳しく述べられている。

他団体の方にも分かるように、ボーイスカウトの紹介・運営方法・研修制度の仕組みの説明、等々も含めた約 16,000 字からなる長文、

力作である。

川崎市青少年育成連盟「30 年のあゆみ」(S51 年(1976) 発行) は、どなたが担当されたか不明だが川崎第 1 隊の発隊から S51.5 月第 48 団発団までが記録されている。さらに地区役員名簿、規約までもが記載されていて、前出〔多摩川〕と違う角度から記録されていて参考になった。





川崎地区の動向が記録された【あしあと】(S25年度～S52年度) 27年間に亘り、以前地区事務長を務められた岩崎貞氏が個人で記録されていた資料が手元にある。B5判 105頁がワープロで打

たれていて、地区役員がどの会議に出席したか、団審査に行った様子等も含めて詳細に記録されている。恐らく印刷はされていないと思われるが大変貴重な資料である。

[元地区委員長 吉澤和雄氏(旧3団)が所有されていたのをお願いしてコピーを取らせてさせて戴いた]

印刷された「記念誌」を読むと書き足りない点や、新団の第56団、57団を書いていないことに気付いて大変申し訳ないことをしたと思い、紙上を借りて“お詫び”いたします。

[ジャンボリー物語] 第9回日本ジャンボリー

寄稿 北條 賢一
(現 地区委員長)

初めてのジャンボリー参加は南蔵王で開催された8NJ。その前の7NJの際はジャンボリーに行きたくて頑張って2級スカウトに進級したものの人数制限があり涙を呑む。シニアスカウト、上級班長として濱田隊長(川崎56団団委員長)の神奈川第4隊に参加。登録人数もほぼピークの時期で生意気な中高生が大集合。サイトの外に出ればあちこちで小競り合いが起きるのが刺激的だった。

しかし何より強烈な思い出は台風。あのマーキー(集会用テント)が宙に舞い、大フライは空のかなた。A型テントは雨でつぶれ、何とか持ちこたえるのは太い鉄パイプのジャンボリーテント。せまい空間に無理やり重なり朝を迎えた。

そんなジャンボリーから4年、同じ南蔵王での9NJ。前年の全国ローバー大会に参加し同年代のRS仲間も増え、とても充実していた青春時代だった。再度ジャンボリーを迎えるにあたり、まず考

えたのは台風対策だった。A型テントをジャンボリーテント並みに強化しよう。細いアルミのポールに長さを合わせた垂木を麻ひもでがっちり固定。テントフライのあおり止めの10mmのロープを1mの垂木ペグで固定。最後は腰までの深さの側溝堀り。そこまで頑張った結果は……。前回に勝るとも劣らない大台風襲来。もちろん濡れたスカウト(北村地区コミッショナーも)もいたけれど大満足だった。



もう一つ思い出は、当時流行った電動水鉄砲。電動だからすぐ水が無くなる。まだペットボトルも無かったなった時代、ゲータレード(スポーツドリンク)の1Lボトルと電動水鉄砲をビニールチューブでつなげてタンク5倍。

まだまだお若かった鈴木隊長と日が暮れるまで子供のように遊んだ。ジャンボリーのプログラムも色々あったけど、それよりも自分で考えて作ったり遊んだりしたことの方が忘れられない思い出である。当時は椅子もテーブルもゲートも全部木材で作っていたから、最終日にロープも全部積んで火を点けて、大きなファイヤーストームにした。全部自分たちで作って、全部燃やして。スカウティングの集大成って感じがしました。

今年もまたジャンボリーが始まります。もうあの頃のような木材をたくさん使って、バンバン火を燃やすような事はないだろうけれど、自分で考えて自分で作る愉しさはきっと不変なんだろう。そう信じています。

[活動報告]

[川崎区ウォーキング]

行事部

実施日：4月30日（土）企画者：佐藤、高安
参加者：谷本会長、大塚、小川、長田、市野・友人、
境、百木、渡部、佐藤、高安、矢沢さん
（川崎市生涯学習財団） 合計12名

令和3年1月新春ウォーキングとして実施予定がコロナ禍で2回延期になり「3度目の正直」で今回やっと実現した。谷本会長の働きかけにより、川崎市生涯学習財団で毎月発行している“Stage Up”誌に当クラブの活動紹介をする予定で、担当の矢沢さんが取材のため全行程同行された。

行程は、東海道かわさき宿交流館、六郷橋、京急港町駅、川崎河港水門、若宮・金山神社、川崎大師、大師公園・瀋秀園、大師河原干潟館、大師橋駅（旧産業道路駅）川崎駅解散。計画歩行距離、約7km。

川崎駅9:30定刻に全員集合、駅前にある“坂本九”さんの歌碑を見に行ったら、高安さんは中学・高校での同級生だったそうである。

東海道かわさき宿交流館を始めとして計画通り川崎大師まで休憩も取らず歩き続けた。

大師駅では草取りをしていた駅職員から、大師線が関東地区の私鉄の始まりだったことや、東京周辺の私鉄物語まで丁寧に説明して呉れた。



川崎大師参拝後、参道のそば屋でやっと一休み。

昼食後、大師公園内“瀋秀園”は姉妹都市の中国瀋陽市より寄贈されたもの。大師河原干潟館（大師河原水防センター）見学。今年3月に開通した

川崎・羽田間を結ぶ“スカイブリッジ”見学の案もあったが下見の結果取りやめたので、計画立案者が新しい橋が見える場所まで案内して呉れたのだろうと思った。歩き疲れていたため有難い配慮であった。「大師橋」駅より電車に乗り川崎駅で解散した。好天气に恵まれて久しぶりの楽しいウォーキングだった。（渡部記）

会員募集

当クラブは昨年発会12周年を迎えました。活動目的として「より幸福な生涯を究めて会員同士の体験学習から楽しさを味わい、成果を生かすため、地域社会・スカウト運動に参画する」ことを目指しています。

奉仕活動、ハイキング、ディキャンプ、親睦旅行などを通して、楽しみながら活動しています。どなたでもご参加いただけます。

お問い合わせは下記へご連絡ください。

連絡先

事務局 わたなべ いさお 渡部 公

電話 090-5499-1280

E-mail: ciao.14125@kce.biglobe.ne.jp

編集後記

- ・春を迎えた時期に新型コロナ禍が一段落して何となく開放感を感じています。控えめにスカウトクラブの活動を続けてきましたが、これからはダイナミックな活動を期待したいと思います
- ・今号では“私とスカウトソング”を特集しました。寄稿いただいた方々のソングにまつわる思いがあり、楽しい内容になりました。有難うございました。
- ・次号は9月20日発行予定です。内容は問いません。投稿をお願いします。機関紙は「皆様の投稿で成り立っています」のでご協力ください。
- ・タイトル写真は宮前区神木本町にある通称“つつじ寺”の「等覚院」です。つつじと同じ時期に咲く“シャクナゲ”も見事です。（IW）